

昨年と今年、担任する学年の子ども達と共に美術館を訪れ、鑑賞の学習をする機会を得た。事前に学芸員さんと簡単な打ち合わせをし、当日のレクチャーをお願いした。

「この絵の中には、どんなものが描かれているかな？さがしてみよう。」

「どうして、鐘の上のウサギは、この方向を向いているのだと思う？」

学芸員さんからの問いかけについて考えているうちに、子ども達の目はだんだん変わってきた。単に「見ている」状態から「鑑賞する」きっかけをつかむことができるように…。自分達で作品の中に次々と発見ができるようになっていったのには驚いた。

「写真ではわからなかったけど、キャンパスに筆のあとがたくさんついてる！」

「この色の重なり合いは、とっても温かい感じがするよ。」

佐藤潤四郎さんのガラスの作品をみて、

「この角度から見た色が一番きれい…。」

今回は、常設展の作品の中から好きなものを選び模写するという活動も取り入れた。「かっこいい」「形がおもしろい」「ほっとする」など選び方にも一人一人の個性が表れる。いつもは元気な子ども達も、静かに気にいった作品と対峙し、鉛筆を走らせていた。

—今日は、きれいな作品をたくさん見ることができて、とてもうれしかったです。

—今度は、お母さんと一緒にきて私が説明してあげたいです。

学校に帰ってから書いた子ども達の感想文には、美しいものをみる喜びとそれを誰かに伝えたい気持ちがあふれていた。

作品をみつめること、細やかな変化に気付くこと、感じること、作者の思いを想像すること…鑑賞を通して、子ども達の感性が豊かになっていく様子を見ることができるのはとても幸せなことである。今後も学芸員の方々のお力添えをいただきながら鑑賞の学習に取り組んでいきたいと思っている。

木村景子(守山小学校教諭)



て、イギリスの工芸デザイナーであるクリストファー・ドレッサーの作品の中で日本や東洋的な要素の認められる作品を紹介しています。

一方では、特に企画展と連動させず、ひとつの作品やテーマを掘り下げて「コレクション」を紹介することもあります。たとえば第一期(4月21日～7月19日)には、「秋山泰計からくりワールド」と題して展示室3で秋山泰計の版画とおびからくり作品を展示しました。秋山のおびからくりを4点収蔵している当館では、これまでも何度か同様に作品を紹介してきました。本来は動かして楽しむおびからくり作品のおもしろさがなかなか伝えられなかったため、今回は模型と一緒に置き、動かすことができるようにしました。

ここでは最近の例をいくつかご紹介しましたが、この他にも毎回、より充実した展示しようとして学芸員が知恵をしばっています。常設



見学のように ワークシートを使うこともあります。

展示室は前に見たから」と思っていたらうっしやるみなさん！ぜひまた2階の展示室においでください。前には見なかった(心に残らなかつ

た、あるいは初めて見るという作品との新たな出会いがきっとあるはず。

当館では、市内の学校に限らず見学される団体から希望があると、学芸員が交代で解説をおこなっています。学校の先生方の中には、子ども達には美術館は難しいとお考えの方もいらっしゃるようですが、決してそんなことはありません。幼稚園の子ども達を案内するときは、私達は子ども達と会話しながら作品を見るようにしています。実はそんなときこそ、私達の方が新鮮な感動や発見に出会うことも多いのです。

特に数年前から、当館では意識的に常設の見学に力を入れています。こうした機会が、美術館の存在意義や役割といった活動全体を説明するなど、美術館への理解を深めると考えているからです。また幼稚園生ばかりでなく、見学者と接することは私たち職員にとっても得られるものが多く、コレクションについて情報を



見学後、子ども達から感想文が届くこともあります。

蓄積していくことにもなります。ときには県立美術館と共同で開発した鑑賞補助教材「アート・キューブ」を用いて、ゆっくり見学する学校もあって、できるだけ希望に沿った対応を心がけています。

これからも、もっともっとみなさまにお楽しみいただけるよう、充実した魅力的な常設展示室になるよう、チャレンジしていきます！どうぞご期待ください！